

4

表情がもたらす二者関係の印象

上田 祥行（京都大学）

私たちは皆、十人十色にそれぞれ違う顔をしています。さらには、顔の形態が異なるだけでなく、表情を変えることによって、同じ人でも色々な情報を伝達することができます。自分たちの身の回りの人や、あるいはテレビや舞台上で活躍されている方々を思い浮かべていただくと、ヒトが非常に豊かな表情を表出できることがわかつてと思います。

表情がもたらす人物の印象

私たちは、他者の顔を見たときに、その人たちについてどのような情報を得ることができるでしょうか。例えば、この人は信頼できるか、魅力的か、自分の思うとおりにことを運びたい人か、集団の中にいると目立ちそうか、大人びているか、有能そうか、思いやりがありそうか、男性的か、女性的かといったように様々なことを推測することができます。こういったたくさんの情報を得ることができるように思いますが、この情報は大別すると、二つの成分に集約することができます。

図1は私たちの作成した74人の顔データベース（こころの未来研究センター表情画像データベース）をもとに様々な評定をしてもらった研究の結果

を示しています¹。この図の一つ一つの点は、一人一人の顔を示しています。それぞれの顔について九つの質問をして、この人は魅力的かとか、この人は信頼できるかなどを評定してもらいます。その結果を主成分分析した結果です。図1では、ある矢印は、この方向に進むにつれて、より思いやりがあるように見える顔であり、反対の方向は思いやりがあるように見えない顔ということを示しています。また別の矢印は、この方向に進むにつれてより有能に見える顔と判断され、反対の方向に進むにつれ、有能であるとは見えないと

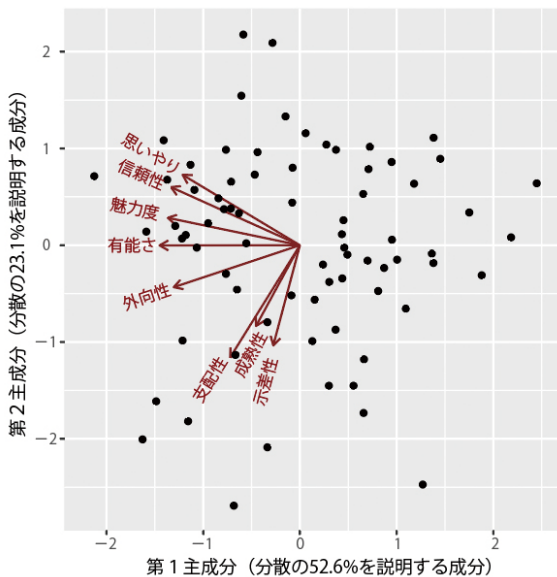


図1 顔の印象を説明する2つの主成分

1 この研究の詳細については、次をご覧ください。

Ueda, Y., Nuno, M., & Yoshikawa, S. (2019). Development and validation of the Kokoro Research Center (KRC) facial expression database. *Psychologia*. 61 (4), 221–240.

判断されるということを示しています。九つの質問の結果を見てみると、74人の顔の印象は2つの成分で全体をよく説明できそうなことがわかります。一つの成分（横軸）は、思いやりや信頼、魅力、有能さ、外向性に代表されるような、いわゆる信頼性 (trustworthy) と呼ばれるものです。もう一つ（縦軸）は、支配性や示唆性、大人びているかどうかを表す軸で、顔の心理学では、ドミナンス (dominance) と呼ばれてきたものです。私たちは、顔からいろいろな情報を推測できるように思いますが、主にはこの2つの種類の情報に集約することができると考えられます。

ドミナンスという言葉聞いたことがない人も多いと思いますので、ここで少し補足しておきたいと思います。ドミナンスとは、他者に指図したりとか、場を仕切ろうとしたりする特性のことで、日本語に直すと、支配性という呼び方が近いと思います。ただ、ここで支配性という言葉を使わないのは、集団を率いるリーダーシップということもドミナンスには含まれます。そのため、その場の主導権を握っているとか、他人を自分の思っているようにしたいという両方の意味を含めて、「ドミナンス」と呼びたいと思います。

一般的には、怒りや嫌悪といった表情は、笑顔（喜びの表情）に比べて、ドミナンスを強く感じさせることが示唆されています。これは文化に依存せず、また人間だけでなく動物でも同じ傾向が見られると考えられています。さらに、ドミナンスの低い人物はよく笑うということや、笑っている人物は物理的な力も弱いと判断されやすいのに比べて、怒っている表情をしている

顔はドミナンスが高いと評価されることが報告されています。研究によっては、笑顔の人物でも高いドミナンスを示すときがあるといった、ちょっと矛盾した結果も示されていますが、多くの場合、怒っている人物はドミナンスを示すと考えられています。

さて、私たちがこういった高いドミナンスを示す表情を前にしたときに、適切な社会行動を取ろうと思うと、どのような情報処理が必要でしょうか。図2に示すように3つの処理段階が考えられます。まず、顔の形態から表情を認知します。その認知に基づいて、その人がどんな状態にいるか、どんな特性を持っていそうかということを推定しなければなりません。この処理は、非言語的（ノンバーバルな）情報処理となります。さらに、この推定に基づいて、私たちはこの人に対して、どのように行動したらいいだろうかを考える必要があります。例えば、この人には近寄らないほうがいいとか、この人とは友達になっても大丈夫かというような、意思決定をします。これまでの多くの研究ではこういった情報処理過程を明らかにするために、1人の人物の顔を呈示して、「この人はどれぐらい信頼できると思いますか」という形で、その人が持つ個人的な特性の理解の仕方を検討してきました。このとき、評価者は1人の他者と向かい合っている場面での情報処理が想定されています。

しかし、実際の生活を考えると、私たちは1人の人物と向かい合っただけではなく、複数の人物と同時にコミュニケーションを取ったり、人の集まっている中で、この人はどのような人物かを把握したりするな

どの、高度で複雑なインタラクションをしています。このようなインタラクションを可能にするためには、集団の中での関係を瞬時に判断しなければなりません。こういった情報処理がどのようにされているかについては、ほとんど研究がありません。その理由の一つとして考えられるのは、観察者が1人の他者と向かい合っている場面で推測された個人特性は、集団の中の関係を理解するときでも使われていると考えられているということです。

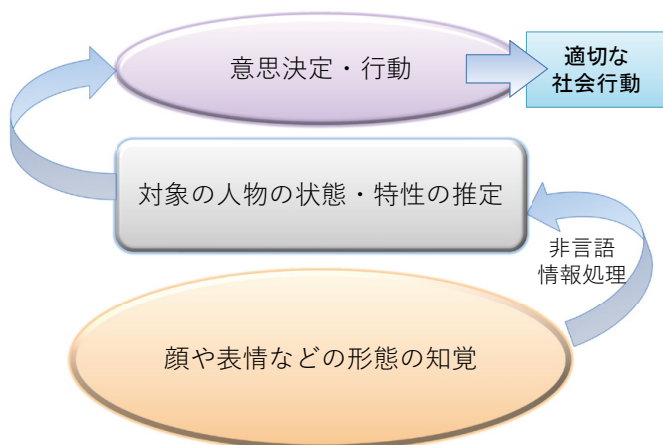


図2 適切な社会行動へと至る3つの処理段階

この仮定は正しいのでしょうか。ここで実際に例を出して見てみましょう。図3をご覧ください。図3 Aの人は、シリアスな顔をしており、少し怒っているようにも見えます。これまでの研究からは、この人物はドミナンスが高い人物であると判断されると考えられます。これに対して、図3 Bの人は、ほぼ笑んだ表情をしており、ドミナンスが低いという雰囲気を受けま

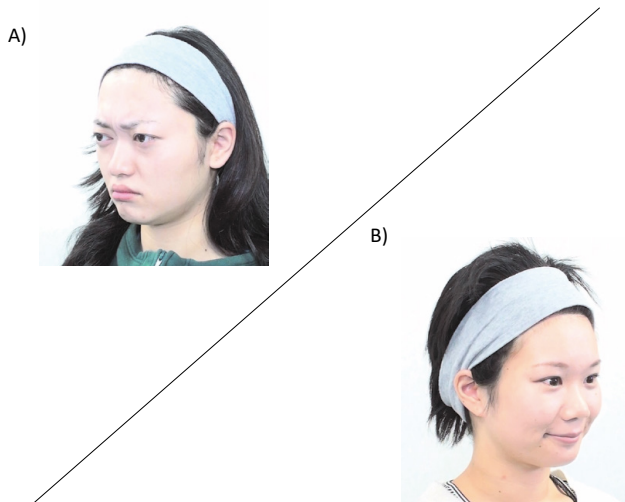


図3 それぞれの人物のドミナンスがどれくらい高いかを推測してみましょう

す。このようにそれぞれの顔を個別に見ると、ドミナンスが高そう、低そうと推測できます。それでは、この2人が同じ場面にいるときを考えましょう。図4 Aをご覧ください。このような状況下で2人が社会的なインタラクションをしていることを想像して、どちらがこの場の主導権を握っているか考えてみましょう。そうすると、必ずしも右側の人が主導権を握っていると判断されないだろうと思われるのではないのでしょうか。別の例も見てみましょう（図4 B）。こちらの場合は、左側の人のほうが厳しい顔をしていて、右側には少し余裕がありそうに見えます。もし集団の中での立ち位置というのが、怒り表情の強さによるものだとするならば、左側が場を仕切っている、あるいはこの場で優位な人物であるというふうに考えられますが、皆さんはどのように思われるのでしょうか。これらの例を見てみると、1人しかいない



図4 2人が社会的なインタラクションをしていることを想像して、どちらがこの場の主導権が握っていそうかと考えてみましょう

場面でドミナンスが高いと判断される人物が、実際に2者場面で場を支配していると認知されるかという、少し疑問が残るように思います。

このように、このプロジェクトでは、個々の表情から推測される個人特性が、より複雑な社会的インタラクションを推測する中でも同じような使われ方をしているのかについて検討しています。より複雑な社会的インタラクションといってもいろいろな場合が考えられると思いますが、ここでは、1人の場面から少し拡張した、2人の人物が向かい合っている場面を考えたいと思います。集団というにはシンプルすぎますが、まずはここを足掛かりにして、将来的にはより大きな集団の中での表情の役割と、社会的インタ

ラクシヨンの認知システムについて、検討を進めていくことを目指しています。

2つのドミナンス知覚

さて、それでは、本研究で行った実験の説明に入りましょう²。まず実験1は、一番基礎となる実験ということで、これまでの研究と同様に、参加者に顔を1人ずつ呈示して、この人物がどれぐらいドミナントな人物に見えるかということ判断してもらいました。実験では、最初に注視点が画面の中央に呈示され、その後顔が現れます。この顔を5秒間見てもらった後に、この人物はどれぐらいドミナンスが高い人物だと思うか、つまり、他者を自分の思い通りに動かすような行動をとる人物だと思うかということ9段階（1＝まったくそう思わない、9＝とてもそう思う）で答えてもらいました。実験中は、様々な人の顔が色々な表情で呈示されます。使用された表情は7つで、基本6情動と呼ばれる、喜び、怒り、悲しみ、恐怖、驚き、嫌悪の表情、それと中立の表情（＝真顔）が呈示されました。

図5に評定の結果を示します。横軸は各表情を示しています。縦軸は評価されたドミナンスの強さを示しており、上に行くほど「ドミナンスが高い人物だと思う」、下に行くほど「ドミナンスが低い人物と思う」となっています。

2 この研究の詳細については、次をご覧ください。

Ueda, Y., & Yoshikawa, S. (2018). Beyond personality traits: Which facial expressions imply dominance in two-person interaction scenes? *Emotion*, 18 (6), 872-885.

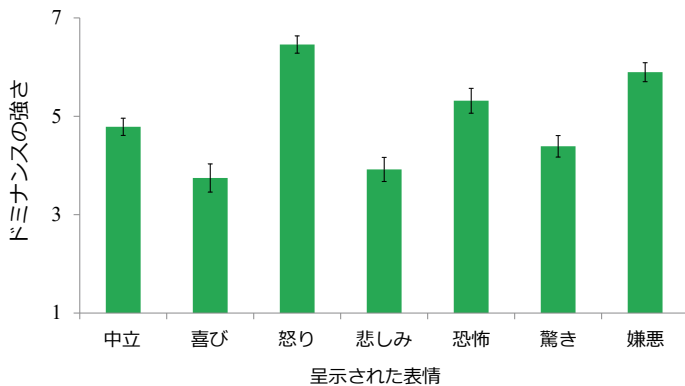


図5 単独場面で判断されたドミナンスの強さ

図を見て分かるように、怒りや嫌悪の表情をした人物というのは、ドミナンスが高い人物だと判断され、笑顔をした人物というのは、ドミナンスが低いと判断されました。ここから、先行研究で示されていたような、怒りを表出する人物は強いドミナンスを持つと判断されることが、再現されていることがわかります。

それでは、この研究の一番の問題である、単独でドミナンスが高いと評価される表情とドミナンスが低いと評価される表情をしている2人の人物が向かい合っているときに、私たちはどのように感じるのかについて考えましょう。実験2では、図4のように2人の人物が向かい合って呈示されました。参加者にはこの2人が社会的やり取りをしていることを想像してもらい、2人の人物のうち、どちらがこの場を仕切っているように見るか、つまり、どちらが優位な立場にいるように見えるかということ判断してもらいました。

実験 1 と同じく、最初に注視点を呈示し、その後 2 人の人物が呈示されます。呈示される人物のペアは、女性同士か、男性同士になっていました。男性と女性が一緒に呈示されると、肉体的な強さの違いが考慮に入れられる可能性がありますので、表情の役割を調べるためにこのようなペアは避けて、女性同士あるいは男性同士という組み合わせで呈示しました。表情は、実験 1 と同じ 7 表情が使用されています。参加者は全ての表情の組み合わせについて、2 回ずつ判断をしました。各組み合わせについて、どちらが優位な立場かという判断を繰り返すと、その結果は勝敗表のような形で表現することができます。その勝敗表から、あの表情がほかの表情に対してどれくらい勝ったか（どれくらいの確率で優位な立場だと判断されたか）をランキングとして知ることができます。

図 6 に結果を示します。横軸はドミナンスのスケールをあらわしていて、右に行くほどドミナンスが高い表情だと判断され、左に行くほどドミナンスが低い表情だと判断されたことを意味しています。それぞれの点は各表情を示しています。ここに示す通り、笑顔をしている人物は、どの表情とペアになっても優位な立場にいると高い確率で判断されました。その一方で、単独場面（実験 1）で怒りや嫌悪の表情をした人物はドミナンスが高いと評定されましたが、実験 2 では、これらの表情は中程度の評価しか得ることができませんでした。これらの表情をした人物は、驚きや恐怖の表情をした人物に比べれば優位な立場であると判断されますが、笑顔の人物と向き合った場合には、優位な立場ではない、場を仕切っているようには見えないという結果

です。この結果を見ると、集団における関係性の認識は、個々の人物の特性を知覚したり推定したりといったメカニズムとは別のメカニズムが働いているということが考えられそうです。

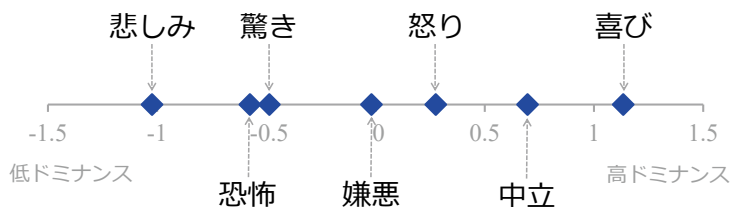


図6 2者場面におけるドミナンスの強さ (右に行くほど高ドミナンス)

これらの結果から浮かぶ一つの可能性として、2人が向かい合っている場面では、そもそもそれぞれの人から感じるドミナンス、他者を自分の思い通りに動かすような振る舞いをしそうかどうかという推測が変わっていたのではないかとあります。この可能性についてチェックしてみましょう。

実験3では、実験2と同じく2人の人物が向かい合って呈示されます(図4参照)。この実験では、それぞれの人物について、どれぐらい高いドミナンスを示す人物か(=他者を自分の思い通りに動かすような行動を取る人物か)を、実験1と同じように9段階で評定してもらいました。画面には2人の人物が呈示されますが、左側の人物はどれぐらい高いドミナンスを示す人物だと思いますか、右側の人は何れぐらい高いドミナンスを示す人物だと思いますかというような形で、それぞれ個別に実験1と同じ質問をしました。

こちらの結果を図7に示します。横軸に表情の種類を取り、どれぐらいその表情がドミナンスを強く感じさせるかを縦軸に取ると、実験1と同じ形になっているのがわかります。怒りとか嫌悪の表情をしている人物は、他者を自分の思い通りに動かすような振る舞いをしがちな人であり、笑顔をしている人物はこういった振る舞いはしない人だと判断されていることがわかります。これらの結果が示しているのは、個々が他者を自分の思い通りに動かすような振る舞いをするように思う程度というのは、2人が向き合っている場面でも単独で呈示される場面でも変わらないということです。しかし、これにもかかわらず、この場の中で優位な立場にいるのはどちらですかと聞くと、笑顔をしている人物であると答えるということが明らかになりました。

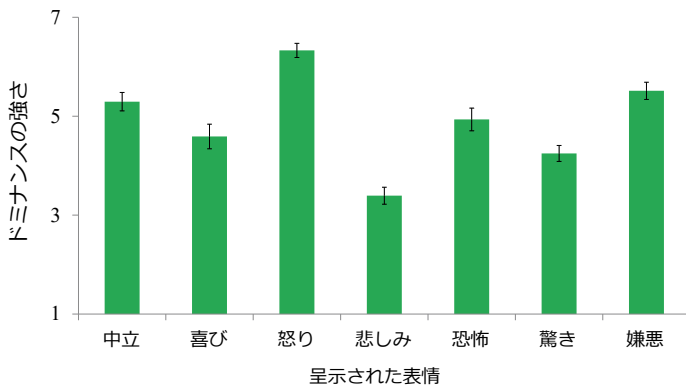


図7 2者場面で個別に判断されたドミナンスの強さ

ここまでの結果をまとめてみましょう。ドミナンスの知覚というのは、相手が単独でいる場合に、その人がどの程度他者を自分の思い通りに動かすよ

うな振る舞いをしがちかという個人特性として判断される場合（個人特性のドミナンスということで特性ドミナンス (trait dominance) と呼んでいます）と、複数の中で誰が実際に優位な立場であるかを判断される場合（関係性の中でのドミナンスということで関係性ドミナンス (relative dominance) と呼んでいます）とで、異なるということが言えます。怒っている表情や嫌悪の表情をした人物は高い特性ドミナンスを感じさせ、笑っている人は低い特性ドミナンスの印象を与えます。ところが、2人がやり取りしている場面では、笑顔の人物のほうが、高い関係性ドミナンスを持っていると判断されます。関係性ドミナンスが特性ドミナンスと異なる基準で判断されている理由は、恐らく怒りの表情をした人の前でも笑顔を表出できるということや、怒っている人の前でも冷静さを保っているということが優位であると判断される原因となっているのではないかと考えています。なお、ここでは時間の関係で省略しますが、このような2つのドミナンスの知覚は、顔が非常に短い時間しか呈示されない、より直観的な判断が重視される場合でも同じ結果が得られることを確認しています。

2者場面における信頼性の判断

ここまでで、最初にお話しした顔の印象に関する2つの成分、ドミナンスと信頼性のうち、ドミナンスの認知について見てきました。それでは、もう一方の成分である信頼性については、関係性の中ではどのように認知されるのでしょうか。同じ実験場面を使って検討してみました。

実験4では、画面中央に注視点を出した後に、2人の顔が呈示されますので、どちらの人物のほうが信頼できる人かを判断してもらいました。この実験では少し試行数を減らすために、これまでの実験でキーワードとなった喜びや怒りという表情は残したまま、表情の種類を少し減らしています。その代わり、実験4では新しく2つの条件を設定しました。直観条件と熟考条件と呼ばれるものです。直観条件の場合は0.5秒で、すぐ顔が消えてしまいますので、即時的な判断が求められます。一方、熟考条件では5秒間、顔が呈示されていますので、実験1～3のようにゆっくりと判断することができました。一般的には、提示時間の長さは、表情と信頼性の関係性には影響しないことが知られており、笑顔の人物のほうが信頼できる人だと判断されがちです。

まず呈示時間が0.5秒のときの結果を見てみたいと思います（図8A）。この実験では、横軸はドミナンスではなく信頼性になっていますので、右側に行くほど信頼できる人だと判断されて、左側のほうが信頼できない人だと判断されたことを示していることに注意してください。結果には、表情の効果が非常にクリアに表れており、悲しんでいる表情や怒っている表情をしている人物は信頼性が低いと判断され、笑顔の人物は信頼性が高いと判断されることが分かりました。

一方で、長い時間をかけて判断できるときにどうなるのかを見てみると（図8B）、非常に興味深いことに、表情の効果はまったく見られなくなりました。今まで、表情と信頼性を調べた研究だと、笑顔の人物は信頼性が高く

て好印象であると言われてきましたが、実はこれは個別に顔が呈示されたとき、もしくは複数の人がいる状況下で、一瞬で判断しなければならないときの効果である可能性が考えられます。複数の人がいて、ある程度じっくり考えることができるという状態だと、信頼性と表情の関連というのはほとんど見られないということが分かりました。

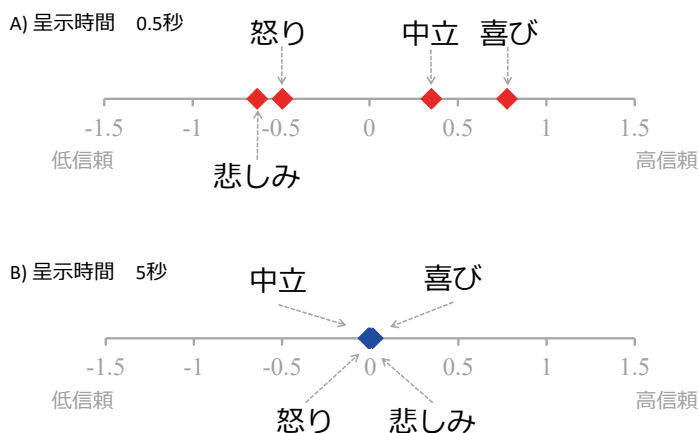


図8 2者場面における信頼性の強さ（右に行くほど高信頼）

実験4についてまとめてみましょう。短時間で直観的に判断する場合、どちらの人物のほうが信頼できるかという判断は、表情に依存しました。笑顔の人物は信頼性が高いと判断されると報告している研究が多くありますが、これらの結果と一致するものです。なお、この表情の効果は、女性ペアのほうが男性ペアよりもやや大きいということも分かりました。男性も笑顔の人物は信頼性が高いと判断されますが、女性ほどにはこの効果は強く見られま

せんでした。しかし、熟考判断が可能な場合には、信頼性における笑顔の優位性は見られませんでした。このような状況では、信頼性の判断には顔のアイデンティティなどから推測されるものの方が重要で、どのような表情をしているかということは、あまり影響しないことを示しています。

では、2者場面で熟考できるときに用いられる判断基準とはいったい何でしょうか。私たちは、何をもってこちらの人のほうが信頼できると判断しているのでしょうか。私たちの使った顔データベースには、最初に説明したように色々な個人特性に関する質問の評定値が含まれています。この人の魅力はどれくらいかとか、思いやりはどれくらいか、有能さはどれくらいかという形の指標がありますので、この指標を使って、熟考判断のときにどのような人が選ばれているのかというのを分析してみました。

表1に、個々の顔から感じる印象と熟考時における選択率の相関を示します。上の段には女性ペアに対して信頼性を判断するとき、下の段には男性ペアに対して信頼性を判断するときの結果が示されています。言い換えると、呈示された2人のうち、それぞれの指標の高い人物がどの程度選ばれるかを示したものと考えていただくとよいと思います。1に近づくほど、それぞれの指標の高い人物が選ばれており、マイナス1に近づくほど、それぞれの指標の低い人物が選ばれたということになります。統計的に有意な相関は太字で色付きにしましたが、女性ペアと男性ペアでは、信頼できる人物の選択に関係する個人特性が異なっていることがわかります。具体的に見ると、女性ペアでは、どちらが信頼できるかを判断するときには、魅力や思いやり、有

能さというように、最初にお見せした2つの成分のうちの第1主成分「信頼性」に関する評価の高い人物が選ばれていました。このことは、女性ペアでは、1人の顔で判断するときに信頼性が高いと判断される人物が、2者場面でも信頼できるというように判断されたことを示しています。興味深いことに、男性ペアでは、女性と同じ魅力や有能さの指標に加えて、示唆性や支配性などの特性が高い人物がより信頼できると判断されていました。男性ペアでの信頼できる人物の判断は、第1主成分「信頼性」と第2主成分「ドミナンス」の両方の評価と関連して、選択されたことが分かります。

表1 個々の顔から感じる印象と熟考時における選択率の相関

	魅力度	思いやり	有能さ	示差性	支配性	外向性	成熟性	信頼性
女性ペア	.69	.74	.55	-.03	-.31	.19	-.53	.77
男性ペア	.46	.37	.50	.57	.61	.69	.32	.39

※絶対値が1に近いほど関係性が強い

これらは、1人の顔を呈示するという実験だけからは分からなかったことです。1人の顔しか呈示されない場合だと、信頼性の高低は、単にその人の顔から得られる印象のみをチェックすることになりますが、2人の顔が呈示されている、かつ、ゆっくり判断する時間がある場合では、いろいろな指標を使ってこれらの人たちの状態を比較して、信頼できるかどうかを判断しているようです。単独場面と2者場面で結果に違いが生じるということは、個別の判断とは違う情報処理プロセスが存在していることを示唆しています。

2者場面におけるドミナンスの判断は文化普遍的か？

さて、最後のトピックでは、関係性の判断における文化的な効果について考えてみたいと思います。ここまでご紹介した研究は、日本で作成された顔データベースの写真を呈示し、日本の参加者で実験を行ったものです。これらの結果は、世界のどこでも見られる普遍的な結果なのでしょうか。あるいは、日本が持っている暗黙の文化ルールがあり、これが反映されたものなのでしょうか。この点について検討してみました。

実験5では、日本と台湾とイギリスの3か国で、実験1・2と同じドミナンス判断の実験を行いました。時間の関係で、詳細な結果は省略させていただいて、要点だけをお伝えしたいと思います。この結果、日本や台湾では、笑顔の人物は、単独場面で評定される特性ドミナンスは低いものの、2者場面で評価される関係性ドミナンスが高いという結果が得られました。一方で、嫌悪の表情や怒りの表情をした人物は、特性ドミナンスは高いと評定されるものの、関係性ドミナンスが高いとは判断されませんでした。さらに、興味深いことに、日本で作られた顔データベースが呈示される場合とアメリカで作られた顔データベースが呈示される場合の2つを行いました。日本でも台湾でも、どちらを使っても同じ結果が得られました。このことは、ここでご紹介した実験1・2の結果が追試されたことを示しています。しかし、日本と台湾の結果が完全に同じであるかというところでもなく、笑顔をした人物の関係性ドミナンスは、日本で特に高く見られました。台湾でも、喜びの表情をした人物は関係性ドミナンスが高いと判断されますが、日本で見ら

れたほど強い効果ではありませんでした。

一方で、イギリスでの実験結果です。イギリスでの実験では、日本で作られた顔データベースが呈示された場合には、日本と台湾と同じ結果が見られました。つまり、笑顔の人物は特性ドミナンスが低いものの、関係性ドミナンスが高いと判断されました。ところが興味深いことに、アメリカで作られた顔データベースではこの結果が違いました。アメリカで作られた顔データベースを用いた場合、嫌悪の表情をした人物が、特性ドミナンスも関係性ドミナンスも高い人物であると判断されました。アメリカの顔データベースに収録されている顔は、イギリスでより流暢性が高い（＝目にしやすい）顔です。これらの結果は、日本や台湾では、自分たちの社会的慣習を普段あまり目にしない対象に対しても当てはめるような、「過度一般化（overgeneralization）」と呼ばれる現象が起きているのに対して、イギリスでは、判断する対象が誰であるかに応じて、異なる判断メカニズムを使用している可能性を示唆しています。つまり、イギリスでは、普段目にする対象とそうでない対象を区別し、過度な一般化をしないという戦略が取られていることを意味しています。

まとめ

さて、ここまで5つの実験を紹介してきましたので、これらをまとめてみましょう。今回の研究で分かったことは、第一に、怒りや嫌悪の表情が、その表出者に高い特性ドミナンスの印象を与えるということです。こ

ういった表情をしている人物は、他人に指図したりだとか、場を取り仕切ったりするような特性を持っているという印象を与えます。第二に、笑顔の人物は、関係性ドミナンスが高いという印象を与えるということです。このような表情は、高い特性ドミナンス、つまり相手に指図したりとか、場を取り仕切ったりするような意図や性格は感じさせませんが、二者の関係で、どちらが優位な立場にいるか、どちらがリーダーかを判断させると、笑顔の人物がこういった立場にいると判断されます。第三に、信頼性の判断では、表情の影響は限定的であるということが分かりました。瞬時の判断では、笑顔の人物が信頼できると判断されましたが、2人が場において、ある程度の時間をかけて信頼性を判断できるときには、表情の影響は極めて小さくなります。このような場合には、私たちは、顔から感じるその人の個人特性を比較して、信頼性が高いほうを判断しているということが示されました。最後に、このような関係性の判断には文化差があるかもしれないことが示唆されました。日本や台湾では、相手は誰であっても同じ方法で関係性の判断をしています。これに対して、イギリスでは、相手によって判断の方法を変えていそうです。この部分については、世界各地で実験を行ったわけではなく、日本と台湾とイギリスという三ヶ国のみでの実験で様態が違ったということですので、今後サンプルを広げていき、何がこのような文化差を生み出すのかについても検討を深めていこうと考えています。

本研究は、日本学術振興会の科学研究費補助金（18H04195, 19K21814,

19K14472, 20H04577) および京都大学「知の越境」融合研究チームプロジェクト (SPIRITS)、京都大学こころの未来研究センターの研究プロジェクトの援助をいただきました。また、吉川左紀子博士 (京都芸術大学)、Rob Jenkins 博士 (ヨーク大学)、葉素玲博士 (台湾大学)、黃柏誠さん (台湾大学) と共同で行った研究です。ここに感謝の意を表したいと思います。

質疑応答

○鈴木 上田先生、どうもありがとうございました。文化差の部分で、なかなか実証的な考察が難しいところがあるとは思いますが、イギリス人は嫌悪の人物のほうが、単独でも2者場面でもドミナンスが高いと判断されるというのは、文化的・慣習的には何か説明というのはあり得るのでしょうか。

○上田 まだ分からないという答えが正直なところです。イギリスの実験でも、日本人の顔を見たときには、笑顔のほうが嫌悪の表情の人物よりもドミナンスが高いと判断していました。日本での実験では、他人種の顔であっても、笑顔の人物のドミナンスが高いと判断していますので、この部分に違いがあるというところまでは分かったのですが、この違いを説明できるのは、慣習なのか、社会の規範や仕組みなのかというところはまだ分かっていません。

最初のほうで、2者場面での関係性をどのように推測するかがなぜ研究されてこなかったのかという部分で、単独場面で推定される性格特性が複数人

場面にも持ち越されていると考えているのではないかという話をしましたが、これはひょっとしたら、イギリスでは真なのかもしれません。これまで日本で行った研究から、個人の顔を見たときに感じる特性と、集団の中での役割や立ち位置は、区別して判断しているのではないかと考えていました。実際のデータもこのような傾向を示唆してましたが、イギリスでは違う結果が見られていますので、ひょっとすると向こうの文化では、単独場面で推定される個人特性がいかなる場面でも適応されるという考え方が主流のかもしれないと考えたりもします。このあたりは今後、さらなる検討が必要かと思えます。

○鈴木 なるほど。ドミナンスを示す笑顔とかも、割と欧米の研究とかもあるのはあるので、笑顔がそれほどドミナントとは感じられないというのが、むしろアジア文化圏で見られるというのは、ちょっと不思議だなと思ったんですけれども。

○上田 少し省略してしまいましたが、これまでの研究では、実は、笑顔は高いドミナンスを示すという研究と、笑顔は低いドミナンスを示すという研究と二つが混在しています。主には後者のほうが主流ですが。この違いは、恐らく、ドミナンスを判断してもらうときに、何を考えるかの前提が研究によって少し違うせいではないかと思っています。この人は支配的な振る舞いをするとか、指図をするとか、自分の思いどおりに人を動かしたいとかいう

考え方は、見方によって悪い特性のようにも思われますが、リーダーシップの一つの形だと考えれば良い特性のように思われます。このように、集団の中で立ち位置が上であるという言い方をどう捉えるかということで、結果が揺れていたのではないかと思います。今回のように、その人が指図的な行動を取るような人かということと、グループの中でリーダー的な行動を取る人かどうかというように聞き方を変えると、笑顔の人物が低いドミナンスを示すという結果と、高いドミナンスを示すと判断される場合を区別できていると思っています。今回の研究は、単独場面でも2者場面でも同じ聞き方をしましたが、これまでの結果では、こういった2つの可能性が混じってしまっているがために、矛盾した結果が混在していたのではないかと考えています。

○鈴木 どうもありがとうございます。質問がありましたね。「2者場面における5秒条件で、表情が信頼性判断に影響しないという結果が興味深かったです。単純に分からない、判断できないからランダムに回答したという可能性もあると思うのですが、実際の参加者の内省でこういった回答はあったのでしょうか」ということなんですけれども、どうでしょうか。

○上田 ありがとうございます。もし分からないという判断で、ランダムに回答した場合だと、顔の個人特性と勝率というのがまったく関係しないことになると思います。ところが、信頼できると選ばれた人は、魅力度が高かったり、外向性が高かったりということが見られますので、ランダムに選んで

いたのではなく、表情で選んでいたのでもなくて、顔の造形から感じられる個人特性をベースに判断していたと言えるでしょう。

○鈴木 どうも、上田先生、ありがとうございました。

○上田 ありがとうございました。